

演奏評

音楽の友 2022年7月号 岸純信氏

第18回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン 世俗的オラトリオ《セメレ》全曲公演

オペラ/音楽

第18回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《セメレ》

5月15日・浜離宮朝日ホール●辻裕久(T:ジュピター)、波多野睦美(Ms:ジューノ&アイノ)、広瀬奈緒(S:アイリス)、牧野正人(Br:ソムナス)、前田ヒロミツ(T:アポロ)、隠岐彩夏(S:セメレ)、酒井崇(Br:カドマス)、中嶋俊晴(C:T:アタマス)、三澤寿喜(指揮)、キャンソンス・コンサート室内合唱団&管弦楽団●ヘンデル「世俗的オラトリオ《セメレ》」(演奏会式全曲上演)

世俗的オラトリオながら、オペラ事典でも「歌劇」として詳説される注自作《セメレ》(1744年、ロンドン)。ドラマはギリシャ神話の美女セメレの悲運を描くもの。英語の台本に拠るのでカストファートは出ず、主人公を誘惑する大神ジュピターはテノールが歌い、準主役の王子アタマスは初演からカウンターテナーが担当した。今回の演奏会形式上演では指揮の三澤寿喜が歌手の技量をよく見定めてテンポを巧く操縦。ファゴットやアーチリユートの涼やかさにも惹かれた。セメレ役の隠岐彩夏は潤いと初々しさ漲る美声の持ち主で、第3幕の大曲を余裕ある歌いぶりで披露。アタマス役の中嶋俊晴も難曲のアリアへもう絶望も私を傷つけはしないを圧倒的な勢いで歌い上げ、喝采を攫った。ジュピター役の辻裕久には丁寧な表現法を認め、善悪2役の波多野睦美は第2幕の広瀬奈緒(アイリス)に軽やかな声で好演とのやりとりが殊に雄弁。主人公の父役の酒井崇の豊かな声量も好感触。大詰めでは合唱へ幸いにが著しく迫力あった。●岸純信